

まんだら通信

第 151 号 (通巻 183 号)

平成 21 年 (2009) 01 月 佛誕 2575 年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口 1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



野島崎灯台の日の出

「もらう」から「与える」へ

遅ればせですが、明けましてお目出度うございます。

今年のお正月は、抜けるような青空に風も吹かず、ゆったりと過ごせて、近頃になり穏やかな年明けでした。

今年はまだ、下立松原神社の行事『夜明かし』が、珍しく元日に当たって、お参りの人が例年になく多く、車の置き場所に困る有り様でした。

お天気の方は、三ヶ日も結構な陽気でしたが、人間世界は『百年に一度の世界同時不況』とか。

殊に、日本の品物を買ってくれていたアメリカや中国やヨーロッパの国々が、俄に貧乏になって、買い手がいなくなりました。そのあおりで、輸出に頼っている日本企業が人減らしを始めたので、正社員でな

い人たちが職を失い、今日の宿にも困る有り様だそうで、その人たちのために都心の日比谷公園にボランティアの人たちが『派遣村』を作り、一時の宿としてテントを張り、全国から寄せられた善意の食料で炊き出しをしていると、NHK (民放は減多に見ません) が放送しています。

カメラの前でポケットから百円玉を取り出し、これだけしかないの、食べることも泊まることも出来ないのです。と言う人を見ると、この寒空に職を失って、お金の毒だなあといいながら、私は決して意地悪な人間ではないつもりですが、「ここにいる人たちが全部に聞いてみたところ、社会に出る時、人並み以上に就職活動をしたけれど定職に就けず、親兄弟など身内もない、本当に運の悪い人たちです」と、NHKは説明しなければならぬと思うのですが、如何でしょう。

辞める時には何がしかの給料を受け取っている筈ですし、困った時はまず身内が手を差し伸べるのは、説明も要らない当たり前のことだからです。

曾野綾子さんが産経新聞に書いた『もらう』から「与える」へ』という記事があります。

タクシーに乗った時に聞いた、運転手さんの身の上話などを聞いての感想です。

女の子を産んで、まだ若いのに奥さんをガンで亡くし、入学前のその子と二人暮らしなのだが、会社の温情で食事時には家に帰られるようになっていたとか。そして、食事の用意も後片づけも、総てその子がするのでそうです。

私は、本当にそんなことがあるのだろうかとビックリしたのですが、曾野さんはもつとその上の話を知っていたので、

余り驚かなかったそうです。

それは、日本の地方都市で、重い障害を持つ人たちと暮らしている外国人の神父さんに聞いた話で、おむつをしている赤ちゃんが、動けない両親の世話をしているというものです。

お父さんが「瘦瓶」というと、それを持って行つて、お父さんが用を足すと中のおしっこをトイレに捨てに行き、自分のおむつ交換は新しいものを持って、動けないお母さんの脇に行つて寝転がって取り換えてもらい、汚れたおむつは自分で捨てに行くのだそうです。

曾野さんご自身が、ペルーで出会った五歳と二歳ぐらいの姉弟は、母親が結核で息を引き取るその時まで面倒を見ていたそうです。

前段の『派遣村』の人たちとは百八十度逆の話です。

曾野さんは言います。「人は誰かの役に立っていると思う限り、ぐれたりヤケになつたりはしないものである。国や親や会社から貰うことばかり考えている間は、決して豊かさを実感出来ない。『与える』姿勢になつた時、初めて豊かになれるのである」と。

仏教には、悩みから解放され、幸せになるための六つの行いがありますが、その筆頭は『布施』、つまり見返りを求めない善行ですね。

お坊さんに差し上げるお金だけではなく、座席を譲る、微笑みかける、温かい言葉をかける、よその悪ガキを叱る。或いはまた、不遇な人に僅かでも援助する、何れも同じ値打ちのある善行ですね。

「何だ、簡単なことだ」と思ふかも知れませんが、今夜布団に入つた時、今日一日をゆつくりと思ひ返せば、全く逆だったという事に気がつきます。

余滴

◆過ぎた1月5日に小寒に入りました。立春の2月4日までの1ヶ月は1年で一番寒く、空気も乾く季節です。呉々も体調に気をつけたいものです。◆冬至から半月ほど過ぎて、僅かですが日脚の延びがハッキリと分かり、夕方5時に鐘を撞く時の数取りの白い墓石が、よく見えるようになりました。朝6時の鐘の時はまだ手暗りのままですが。◆山門の鬼瓦に住み着いている日本ミツバチです。冬眠はせめまでも、じっと固まって冬を過ごすのかと思ひましたが、晴れた日にはサザンカの生け垣で元気に蜜集めをしています。◆NHKの『お江戸でござる』でお馴染みだった、杉浦日向子さんの書物

を読んでいます。

三行半 (みくだりはん) は、嫁入りの時に親が持たせたもので、旦那さんが不始末をすると、奥さんが書かせたものとか。再婚の時の証明書になるのだそうで、寧ろ出戻りの方がもてはやされたなど、聞いていたこととは逆のことばかりで、女性の方が遥かに強かったということですね。

あの時代はまた、物価が全く変わらなかったのだそうで、今の言葉で言えば、成長率ゼロだったということですね。

捨てるということのない、リサイクル率100%の世界でもあったそうで、使い古しのわらじは一ヶ

所に集めておいて、有料で集めて堆肥にして農家に売り、燃やした灰は『灰や』さんが有料で集めて、必要のところ売ったのだそうです。幾つになっても、本を読むと発見があります。◆今月の野草。お馴染みのオオイヌノフグリ【ごまのはぐさ科クガイソウ属】です。明治初期に渡来した帰化植物とのことですが、「犬の陰囊」なんて、他によい名前は無かったものではないか。星をちりばめたような可憐な花ですね。

畠に入られると、先へ先へとほびこって厄介な野草ですが、春一番に咲いて目を楽ませてくれます。 2009.01.09 龍渉



につぼん人情小噺 第三十七話【焼鳥屋さん】

えー、相変わらず嫌な事件が続きますねえ。

落語の世界では、こんな小噺がありますので、ひとつ。

「おいおい、この間、町内で起こった事件、すごかったねえ」

「ああ、若い娘が突然刺された事件か」

「そうだよ、真昼間なのに、なんで犯人が捕まらないんだらう」

「いや、もうすぐ解決するよ、あの事件」

「どうして」

「どうもな、真犯人を角の団子屋がね……」

「団子屋が真犯人を？」

「み・た・ら・し」

今日は、私の友人でもあります焼鳥屋さんの話をいたしましょう。

彼は元俳優です。ですから、若い時の写真を見ますと、苦み走ったとてもいい男でした。出身は北海道の釧路。大変に貧しい家に育ったので、定時制の高校を出ますと、母に作ってもらったおにぎりを三つ持って、上京します。

ひとつは、青函連絡船の中で、もうひとつは上野にもうすぐ着くという列車のなかで、そして最後は旅館のふとんのなかで涙を流しながら食べたそうです。

翌朝、旅館代を払ったら、もうおカネがなかったそうですが、あの柔らかなふとんにくるまったときの温かさは一生、忘れないと言います。

冬の北海道。一枚のせんべいぶとんに弟と妹の三人で寝ていた毎日でしたから、ふわふわしたふとんで寝るのは、まさに夢心地だったにちがいありません。翌日から職探しです。でも、幸い、繁華街のキャバレーのボーイの仕事が見つかりました。彼は、深夜まで働き、店のボックス席を借りてそこに寝泊まりしていました。しかし、無理がたたったのでしよう。体をこわし、店の倉庫に運ばれ、医者に診せるカネもないまま、倉庫のビールの空きビンのなかでただ横たわっているだけでした。話し相手は時々やつてくるネズミ

だけ。そのネズミが北海道の母に見えたそうです。「かあちゃん……」

思わず、そう叫ぶと、こらえていた涙が一気に頬をつたいます。その深夜、心配してくれたひとりのホステスがやってきました。そして、気がついたとき、彼は病院のベッドにいたのです。

そのホステスさんも苦労人でした。恋人を事故で亡くし、好きでもない客の愛人となって夢のない毎日を送っていたそうです。もちろん、彼より年もずっと上ですから、きつと弟のように思っていたのでしよう。

彼女の献身的な介護があり、さらには愛情に支えられて、昼は演劇スクール、夜はボーイという生活が始まりました。やがて、自立した彼を見届けると、彼女は別のサラリーマンと結婚します。

それから十数年、彼はテレビの『大都会』や『西部警察』などのドラマにレギュラーとして出演する俳優になります。ところが、好事魔多しですね。ファンと自称する女に馴され、強姦致傷容疑で逮捕されてしまいます。和姦を主張しますが、裁判所からは懲役四年を言い渡され、彼は津刑務所に入ります。

前置きが長くなりましたが、話は出所後、彼が俳優をあきらめ、見知らぬ土地で焼鳥屋を始めたある日に飛びます。

屋台で焼鳥を売っていると、ひとりの少女が泣きながら歩いている姿を目にしました。訳を聞いて驚きました。妊娠しているというのです。聞けば、高校二年生。親に相談したのかと言え、相談できない。このまま川に飛び込んで死ぬという。あとは、ただただ泣くばかり。「それじゃあ、おじさんがなんとかしてあげるから、とにかく死ぬのだけはやめよう」

彼はさっそく地元から十数キロ離れた産婦人科に彼女を連れていきます。そして、あろうことか、医者にこう言ったのです。

先生、俺、馬鹿なことをしちゃった。娘みたいな年の子としちゃってよ、この子を妊娠させた。「俺は逮捕されてもいいから、この子の将来のためによ、子どもを堕してやつて下さい」

医者とその奥さんは、彼を罵倒し続けたあげくようやく見せしめのためか、彼女に宿った命が墮ろされる現場を見ることを条件に、手術を了承してくれました。彼女が目を覚ますと、隣りに彼がいました。

「焼鳥屋さん……」

「何も言うな。二度と馬鹿なことをしてはいけないよ、いいね」

そう言うのと、彼はアイスクリームをひと口、スプーンですくって、彼女の口の中に入れてあげました。

それから、十年後、焼鳥屋さんはその子の噂話を耳にしました。彼女は、幸せな結婚をし、子供がふたり、六歳と三歳になるそうです。でも、子供にアイスクリームを口に運んであげるたびに、大粒の涙がこぼれて止まらないのだそうです。

「ママ、なんでいつもアイスクリームを食べると、泣くの？」

「あなたがね、大きくなったら話してあげる」その話を聞いた彼の目にもうつすら涙が浮かびました。

「よかったなあ……よかった、よかった」

「おい、親父、レバとハツ、タレで」

「へい」

大辻慎吾。本名、堀部一雄。茨城県竜ヶ崎という小さな町で、今夜も酔客を相手に、焼鳥を一生懸命焼いています。

先月号に続いて月刊MOKUに掲載の、三遊亭鳳豊さんのお書きになったものを、「ご自由にお使い下さい」とのご好意で転載させて頂きました。「落語界から直木賞を」と、執筆活動中だそうですが、いつもながら読んでいて、思わず目頭が熱くなるいいお話しです。

こういうお話を読むと、「こんな世の中でも、結構男気のある人っているんだなあ」と、救われるような気持ちになります。

兎角、暗い話が多い昨今ですから尚更ですね。